

グローバル時代に求められる教員養成プログラムの教育的効果に関する研究

―日米協働による「体験型海外教育実地研究」を通して―

| | | |
|-------|----------------|----------------|
| 研究代表者 | 深澤 清治 | (英語教育学講座) |
| 研究分担者 | 朝倉 淳 | (初等カリキュラム開発講座) |
| | 松浦 武人 | (教職開発講座) |
| | 松宮奈賀子 | (初等カリキュラム開発講座) |
| 研究協力者 | Sponseller, A. | (グローバル教育推進室) |
| | Walter, B. R. | (グローバル教育推進室) |

I 研究の背景と目的

1. 研究の背景

社会のグローバル化が加速化する中で、それに伴い全ての教員に求められる資質・能力(グローバルコンピテンス)の一つとして「グローバルマインド」の育成が必要と考えられる。それはグローバル時代に活躍する教員に求められる語学力や多文化理解能力の基盤となる資質であり、本学の基本理念5原則のうち、平和を希求する精神や地域社会・国際社会との共存とも密接に関わっている。以下ではグローバル人材の育成にあたることのできる教員を「グローバル教員」と呼ぶこととする。

本研究グループは、広島大学大学院教育学研究科において教科の枠組みを越えて一つのチームとして20年以上にわたって、グローバル教育を牽引できる未来のリーダー養成をめざして人材育成に取り組んできた。その中心的役割を果たしてきたのが広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター(以下略称 GPSC)であり、アメリカ合衆国ノースカロライナ州の連携校(幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学)と協力して本研究科大学院生による体験型海外教育実地研究、教員の相互訪問、交流授業の実施、国際フォーラムの開催、などを実施してきた。とりわけ、体験型海外教育実地研究は開始以来11年目、参加院生数は100名を超えており、今後の改善を図るために、プログラム評価をする必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、本年度の共同研究プロジェクトの支援を受けて、特にこれまでの研究成果をもとに体験型海外教育実地研究を中心としたグローバル教員養成プログラムがどのような教育的効果をもたらしたかを評価し、グローバル教員養成プログラムのあるべき方向や課題を検討、示唆することを目的とする。主な研究方法は以下のとおりである。

- ①第13回学校間国際フォーラム「グローバル時代に求められる教員養成」(平成29年7月8日)における協議の検討
- ②「第11回体験型海外教育実地研究」(平成29年9月15日～9月25日)参加者による研究報告書と開発教材集の作成
- ③同実習を通じた教員としての成長という視点から自己変容の検討とプログラム評価
(深澤清治*・朝倉 淳・松浦武人・松宮奈賀子)

Ⅱ 第13回学校間国際フォーラムにおける協議の概要

1. フォーラムの概要

本年度のフォーラムのテーマは「グローバル時代に求められる教員養成」であり、その概要・プログラムは以下のとおりであった。

主催：広島大学 グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター

日時：2017年7月8日（土）13:00～16:10

会場：広島大学大学院教育学研究科 K102 教室（広島県東広島市鏡山1丁目1-1）

テーマ：グローバル時代に求められる教員養成 (Teacher Education in a Global Era)

内容：総合司会：松浦 武人（広島大学大学院教育学研究科）

開会行事 (13:00-13:10)

- ・挨拶 草原 和博（広島大学大学院教育学研究科副研究科長）
- ・挨拶 深澤 清治（広島大学 GPSC 代表）

基調提案 (13:10-14:10) 紹介：神山 貴弥（同志社大学）

テーマ「体験型海外教育実地研究の10年の歩みを振り返って」

朝倉 淳（広島大学大学院教育学研究科）

シンポジウム (14:20-16:20)

テーマ 体験型海外教育実地研究体験が与えたインパクト

(The Impact of Overseas Teaching Practicum in the US)

コーディネーター 松宮奈賀子（広島大学大学院教育学研究科）

コメンテーター Jessica Gribbon（米国 NC 州 C.M. エッペス中学校）

Paul Phillips（米国 NC 州ウォールコート小学校）

話題提供者 神野 幸孝（体験型経験者・ウォールコート小学校）

平野 優希（体験型経験者・ウォールコート小学校）

吉川 友則（体験型経験者・エルムハースト小学校）

山本 稜（体験型経験者・C.M.エッペス中学校）

閉会行事 (16:20-16:30)

- ・挨拶 小原 友行（福山大学・前広島大学 GPSC 代表）

このほか、会場では日米の学校間交流を促進する GPSC の様々な活動を紹介するパネル写真、教材集、紀要などの提示が行われた。

2. 登壇者によるフォーラムの討議の概要

まず、基調講演に立たれた朝倉教授は、「グリービルの風」と題して体験型教育実地研究の10年間の取組を振り返りながら、NC、USAの変容、ヒロシマ・日本の変容、地球の変容・世界の変容が定常的に起こる中で、いつもそこにある危機、変わらない思い・友情、そして新しいそれぞれの物語、という「不易と流行」を語られた。そして本プロジェクトを継続することにより、参加院生の授業力やプロジェクト企画・運営力を養成すると同時に、学術研究、平和な社会づくりにどのように貢献していけるか参加者に問いかけられた。

続いて、2名のアメリカの小・中学校教師は、体験型実習を通してアメリカ側へのインパクトとして2点を挙げられた。第一に子どもたちへの影響として、子どもたちにとって海外からの訪問者による授業はとても新鮮で、日本の将棋などを通して生徒に異文化に触れさせたこと、自分の文化を他者の視点から見ることができたこと、授業の焦点を押さえながら子どもたちに楽しい学習活動を実践したこと、などを指摘した。アニメ、ゲーム、コンピュータの国であるというイメージをもたれている日本から伝統的な行事や遊び、文化についての授業を受けることで遠い文化が身近に感じられたということであった。第二に、受け入れ校の教師にとっても、日本人大学院生の教材開発、教具の工夫、指導過程、ユニークな活動の取組、そして教育への熱意から学ぶことが多いということであった。

話題提供者による体験型実習の成果と課題については、昨年の平成28年度共同研究プロジェクト報告書にまとめられており、重複を避けるために割愛することとした。

翌7月9日にはアメリカ側から参加された2名の教師に参加してもらって、体験型のための授業研究ワークショップを行い、英語による学習指導案と教材の検討、教材の内容や難易度によって学年指定を行った。また、アメリカの教室での様子や教室での行動規範などについて助言を受けた。

(深澤清治*・朝倉 淳・松浦武人・松宮奈賀子)

Ⅲ 平成29年度体験型海外教育実地研究の概要

1. 全体日程

2017年度4月に始まり12月末までにわたる本授業科目の実施状況（全体日程）は以下のとおりであった。

- 4月6日（木） 本授業の概要と計画説明
- 4月27日（木） 授業研究テーマ事例の考察および渡航のための諸手続きの確認
- 5月23日（火） 授業研究テーマ案の交流・設定
- 6月7日（水） 学習指導案の検討(1)
- 6月13日（火） 学習指導案の検討(2)
- 6月28日（水） 学習指導案（英語版）の検討(1)
- 7月3日（月） 学習指導案（英語版）の検討(2)¹
- 7月8日（土） 第13回学校間交流国際フォーラム参加
- 7月9日（日） 2017年度「体験型海外教育実地研究」授業研究ワークショップ参加
- 8月7日（月） 学習指導案・教材・教具の検討および渡航のための諸手続き
- 9月4日（月） 準備状況の確認、教材集・報告書の作成・報告会についての確認、渡航に関する書類提出
- 9月11日（月） 渡航前最終打合せ
- 9月15日（金）～9月25日（月） 米国における「体験型海外教育実地研究」
- 12月20日（水） 「体験型海外教育実地研究」研究成果報告会

¹ 今年度は、教育学研究科グローバル教育推進室のスポンセラー先生、ウォルター先生に英語母語話者として英語の指導案や教室英語について添削・指導をお願いした。

2 現地での日程

- 9月15日(金) 広島出発, 成田泊
- 9月16日(土) 成田出発, 米国ノースカロライナ州ローリー到着
- 9月17日(日) グリーンビル到着, 授業準備および授業打合せ
- 9月18日(月) グリーンビル現地学校訪問(観察), イーストカロライナ大学教材開発センター見学, 同大学学生との交流
- 9月19日(火) グリーンビル現地学校訪問(授業実施)
- 9月20日(水) イーストカロライナ大学の授業参加, ローリーへ移動
- 9月21日(木) イクスプローリス中学校・小学校見学
- 9月22日(金) ローリー市内(博物館等)研修, ワシントンへ移動
- 9月23日(土) ワシントン(スミソニアン博物館等)研修
- 9月24日(日) ワシントン出発, 機内泊
- 9月25日(月) 広島到着

3 参加者およびグリーンビルにおける配置

本年度の「体験型海外教育実地研究」の授業には12名の大学院生(うち現職教員3名)が参加した。参加院生の現地での学校配置, 担当者, 参加者, 引率教員は以下のとおりである。

【エルムハースト小学校(K-5)】

実施校担当者: ワンダ・ウィリアムズ先生
参加者: 尾藤郁哉・古川恵理・近藤秀樹・城戸ナツミ
引率者: 朝倉 淳

【ウォールコート小学校(K-5)】

実施校担当者: シンディー・ワトソン先生
参加者: 泉沙希・福田麟太郎・中山貴司・吉崎優葵
引率者: 松浦武人

【C.M. エッペス中学校(6-8)】

実施校担当者: アリソン・キリー先生
参加者: 宗本千鶴・畠山絢・塩田佐恵・高木勝海
引率者: 深澤清治

【イーストカロライナ大学】

実施校担当者: サンドラ・ウォレン教授
連絡担当: 松宮奈賀子

4 本年度の授業の実施状況

平成29年度の体験型海外教育実地研究において参加者A~L(授業者院生)によって開発・実施された授業の実施学年と題材・テーマは, 次ページ表1のとおりであった。表中の「教科等, 題材・テーマ」は参加者が付したものであり, 実習当該校においてそれぞれの授業は教育課程外の投げ入れ授業として位置づけられるものであった。

表1 実施授業の学年と教科等

| 学生 | 学年 | 教科等名(上段) テーマ・題材等(下段) |
|----|----|--|
| A | 3 | 異文化理解 Let's find the goodness of "Fall"! |
| B | 3 | 異文化理解 Let's enjoy Rakugo! |
| C | 3 | 異文化理解 Let's learn about "oshogatsu" and enjoy "fukuwarai" |
| D | 4 | 異文化理解 Let's tell your future dream to Japanese children! |
| E | 4 | 異文化理解 Let's play paper sumo! |
| F | 5 | 体育 Let's dance "Sorani"! |
| G | 5 | 異文化理解 Let's make an original "furin"! |
| H | 5 | 理科 How interesting dragonflies are! |
| I | 7 | 異文化理解 Let's create your own Mononoke! |
| J | 7 | 異文化理解 Let's create an original 4-koma manga! |
| K | 8 | 異文化理解 Let's create the "History Karuta" |
| L | 8 | 異文化体験 Let's introduce our school! |

参加大学院生は、日本での事前学習(米国から招聘した関係校教員とのワークショップを含む)により、テーマ・題材等の設定から英文による学習指導案の作成までを行い、また、渡航前に教材・教具の準備、資料の作成などを行った。渡航の後は、授業実施までの二日間で、授業実施校の教員と打ち合わせを行い、授業過程や教室環境などについて一応の確認をしている。

本年度、ノースカロライナ州グリーンビル市の小中学校3校において、参加大学院生12名が実施した授業は上の表1のとおりである。教科等やテーマ・題材等については、基本的には参加者自身が考え、独自に設定したものである。今年度実施された授業は、「テーマ・題材等」からおよそ次のア～ウのように大別される。

表2 開発教材により目指す授業の分類

| | |
|---|---|
| ア | 主に日本の伝統や文化、特色ある事象などを紹介する授業(B, C, E, F, G) |
| イ | 主に特定のテーマについて、内容を深めたり日米における共通点や相違点を考えたりする授業(A, H, I, J, K) |
| ウ | 主に日米の児童生徒がそれぞれの生活や想いを交流する授業(D, L) |

授業環境には様々な難しい状況もあったが、すべての授業は、計画していたことが、ある程度あるいは一応できた形で終わることができた。これは、参加大学院生の努力の結果であるとともに当該校の児童生徒、教職員の協力や支援のお陰でもある。

その一方で、参加大学院生は、授業実施後、自らの授業について授業構成上の課題や実践上の課題など多くの課題を発見している。発問の吟味、説明の工夫、授業過程の単純化、時間配分の見直し、個別指導の方法など、ほとんどは日本における授業研究においても課題となる点であり、授業づくりの基本は日米でともに重要であることが確認された。本授業科目の趣旨でもあり、本授業科目にとっては、課題というよりは成果の一つということができよう。

(深澤清治・朝倉 淳・松浦武人*・松宮奈賀子)

IV 参加大学院生の変容

以下では、渡米中に随時実施したミーティングの内容や参加大学院生12名(現職教員3名を含む)が自ら記述した「自己の変容」および帰国後に実施したアンケートなどをもとに、授業科目としての「体験型海外教育実地研究」を通して、とりわけ米国での授業実践を通して、参加大学院生の何がどのように変容したかを考察する。

1 アンケート調査から

アメリカから帰国後約一ヶ月後に、参加者12名を対象に自己変容に関する以下のようなアンケートを実施した。項目は「Ⅰ. 英語力の向上について(8項目)」と「Ⅱ. 人とのやりとりについて」(12項目)に分かれ、それぞれ4(そう思う)から1(そう思わない)の4段階での調査及び自由記述でデータを収集した。その結果は表3のとおりである。

第一に、短期滞在であるため「Ⅰ. 英語力の向上について」は多くを期待することはできないが、リスニングとスピーキングにおいて若干の自信(4段階評価中の3「ややそう思う」以上)の伸びを感じていることがわかる。とりわけ、「8 やさしく言い換える(別の言い方で言う)力が伸びた」の項目にも伸びを示しており、英語が日常的に使われる環境でいろいろなコミュニケーション方略を試したことがうかがえる。

第二に、「Ⅱ. 人とのやりとりについて」においては、12項目中、半数において3「ややそう思う」以上の回答がみられた。その中で最も大きな伸びがみられたのは、次の3項目であった。

| | |
|-----------------------|-----------|
| 13. コミュニケーション力が伸びた | (平均 3.33) |
| 14. 多様性を受容し尊重するようになった | (同 3.75) |
| 16. チャレンジする勇気が伸びた | (同 3.33) |

表3 体験型海外教育実地研究参加者アンケート

| 調査項目 | M | (SD) |
|--------------------------------------|-------------|---------------|
| I. 英語力の向上について | | |
| 1. リスニング力が伸びた | 3.17 | (0.66) |
| 2. スピーキング力が伸びた | 3.00 | (0.55) |
| 3. リーディング力が伸びた | 2.42 | (0.73) |
| 4. ライティング力が伸びた | 2.17 | (0.66) |
| 5. 発音が良くなった | 2.33 | (0.72) |
| 6. 語彙力が伸びた (単語の力) | 2.67 | (0.82) |
| 7. 文法力が伸びた (正しく理解・表現する力) | 2.42 | (0.73) |
| 8. <u>やさしく言い換える (別の言い方で言う) 力が伸びた</u> | 3.08 | (0.61) |
| II. 人とのやりとりについて | | |
| 9. 論理的な思考力が伸びた | 2.33 | (0.60) |
| 10. 批判的な思考力が伸びた | 2.42 | (1.00) |
| 11. 忍耐力が伸びた | 2.58 | (0.92) |
| 12. コミュニケーション力が伸びた | 2.92 | (0.83) |
| 13. <u>柔軟な見方ができるようになった</u> | 3.33 | (0.82) |
| 14. <u>多様性を受容し尊重するようになった</u> | 3.75 | (0.42) |
| 15. 交渉力が伸びた | 2.67 | (0.91) |
| 16. <u>チャレンジする勇気が伸びた</u> | 3.33 | (0.91) |
| 17. 自立性が伸びた | 2.92 | (0.83) |
| 18. 自分に自信がついた | 3.00 | (0.68) |
| 19. 積極性ができた | 3.08 | (0.73) |
| 20. 人間関係づくりがうまくなった | 2.75 | (0.42) |

これらはそれぞれ、表現力、他者受容、積極的な態度を表すものであり、グローバル市民にとって必須の資質・能力にかかわるものと考えられることができる。

続いて同じく、自由記述においては次のような記述がみられた。

- ・教育観等、教育に携わる上での考え方に変容があった。
- ・現地の先生方や学生の皆さんを見て、前向きに興味を持って聞くこと、一度受け入れること、とことん楽しむことの大切さを再認識しました。また、単純でわかりやすいことのよさに気づくことができました。
- ・伝えようとする力、学びに向かう人間性。
- ・学校見学を通して、協働することや社会へ貢献することを重視した教育実践を学び教育観に変容があった。
- ・相手のことを気遣う態度が少し身に付いたと思います。
- ・海外に行くということに対するハードルが下がりました。

- ・報告会で他の参加院生が報告した経験や自己変容、成長等を聞くことで、このような機会 で新たな気づきや他者理解をするために、どのような見方や考え方をすれば良い のかがとても勉強になり、試みていこうと思った。

自由記述においても、他者意識、他者理解、積極性、協働性などについての個人内変容 に対する気づきが示されている。短い滞在において、このようなグローバル教員としてコ ア意識・技能に働きかけることができたことは、この体験型実習の最も大きな成果と言え るであろう。

(深澤清治*・朝倉 淳・松浦武人*・松宮奈賀子)

2 自己記述にみられる変容

続いて、体験型全般の振り返りに加えて、各自が実習を行った学校での授業実践を振り 返ることで得られた自己変容について分析していく。参加者 12 名のうちから無作為に 3～ 7 学年までの 4 人の記述を以下に示す。

表 4 参加校での実習体験をとおした自己変容の記述

| 参加者 | 自己変容の記述 |
|---------------|--|
| A (第 3 学年 担当) | 授業をして出た課題は、特別アメリカだから生じたものかという、そうではないこと に気づいた。授業後の反省会で「英語ができる＝コミュニケーションができる」ではない、 その逆もまたしかり。という先生の言葉を聞いて、自分は言語の壁のせいにして思考を停 止していたと反省した。これは日本で授業をする際もいえることである。あらかじめ子ども の状況をもっと具体的に想定することだけでなく、授業内で教師が予想していない反応 だった時どうするかまで考えるべきだと学んだ。自分がこれから教師になるうえでも、教 材研究に重点を置きすぎるのではなく、生徒にとってそれをどう扱えば有用なものになる のかを考えていきたいと思った。 |
| B (第 4 学年 担当) | Wahl-Coates 小学校の先生に「教師をしていてよかったこと・大変なこと」を質問した 際、「大変なことは毎日ある。でも明日がある」といった内容の返答をいただいた。今日う まくいかななくても、明日やり方を変えてやってみるということを日々先生方は行っている のだとわかった。失敗への不安を感じるが多かったが、うまくいかないことがあっても 次があるという考え方に触れることで、継続した生活の中でよりよくするために挑戦し 続けていけばいいのだという考え方へと変化した。 また、コミュニケーション能力のとらえ方も変化した。コミュニケーション能力とい うのは言語化できるかどうかという点だけではなく、伝えようとする気持ちやそれに伴った 行動、理解しようとする姿勢、そしてうまくいかなかった時にどう対処するかという点も 含まれると考えるようになった。英語力がないからうまく伝えられない、とコミュニケー ションをとることから逃げてしまっていた部分があったが、伝えようとアクションを起こ せば、相手は理解しようとしてくれることがわかった。 |
| C (第 5 学年 担当) | 今回の経験を通して最も感じたことは、アメリカの人たちの積極性である。例えば買い 物をするとき、挨拶の後に必ず一言、調子はどうか、どこから来たのかななどを聞かれた。 |

| | |
|------------|--|
| | これは、日本ではあまりないことである。形式的なやり取りだけでなく、一歩踏み込んだ質問をしてくれることで、こちらも気持ちがあぐさされ、リラックスして会話することができた。相手に興味をもって質問をすることで、された方はとても嬉しい気持ちになるということを、言葉が通じにくい外国であるからこそ感じることができたのだと考える。教師になった際には、ぜひ実践してみたいと強く思う。 |
| D (第7学年担当) | 私はこれまでアメリカの学校を訪れたことが無く、アメリカの中学生は日本の中学生とさぞかし色々な事が違うのだろうと思っていた。しかし、今回の授業や学校訪問の中で、違いよりも多くの共通点があるように感じた。そして授業をする上で最も大切なのは、日本でもアメリカでも生徒全員が参加し、思考を働かせるような課題設定と指導の工夫であることが分かった。C.M. Eppes Middle School は、家庭環境の厳しい生徒たちが多く通う中学校であったが、先生方は生徒が力をつけるよう学校全体で様々なプログラムを実施されておられた。アメリカの先生方に負けぬよう、私自身今後も授業力を磨いていきたい。 |

これらを大きくまとめれば、次の3点に集約される。

(1) コミュニケーション観の変容

参加者の外国語能力にはばらつきがある中で、異なる言語環境の中でどのようにコミュニケーションの目的を達するか、困難なコミュニケーション場面をどのように切り抜けるか、いわゆる外部試験の数値とコミュニケーション能力は比例するか、などの思考、経験を通して、コミュニケーションとは何かについて深く考える機会になったと思われる。

(2) 授業観の変容

アメリカでの授業実践を体験することで、これまで学校教育を通して慣れ親しんできた日本型授業観を揺さぶられる、また日本的な授業を客観視する機会となった。外国語というハンデを背負いながら、どのように指導内容を伝えるのか、いかに生徒に興味をもたせるか、相互作用型授業をどのように実現するか、など改めて授業力向上を図る必要性を自覚することができたであろう。

(3) 文化観の変容

いかにメディアが発達したとしても、得られた情報は、目で見て体感した直接体験に勝るものはない。アメリカについて漠然と持っていたイメージが、訪問地のローカル文化によって変化することもあり、また相違点にばかり目がいていたのが、教師や生徒の気持ちに多くの共通点があることを見いだしたことは大きな発見であろう。

(深澤清治・朝倉 淳*・松浦武人・松宮奈賀子)

V 研究の成果と今後の課題

今年で第11回目を数えた体験型海外教育実地研究が、グローバル化時代に求められる教員養成の一環としてどのような効果をもたらしたかを報告、考察してきた。参加教員、大学院生が4月当初の体験型事前指導から授業計画、ワークショップ、そして事後学習へと一学期間、わずか1時間の授業のために手作りの教材の開発、指導計画の作成に取り組んだことで多くの自信と感動を得たと確信している。今後への課題として、グローバルマインドを持つことは、多文化理解だけでなく、自文化のより深い理解をも必要とすることから、アメリカ合衆国の社会、文化をより深層的に理解すると同時に、日本文化にもさらに

深い関心と理解を持つことが必要であろう。最後に、このプログラムに支援、協力いただいた広島大学大学院教育学研究科、そしてアメリカ合衆国ノースカロライナ州のイーストカロライナ大学サンドラ・ウォレン教授、そして現地受入校の教員の皆さんに感謝したい。

(深澤清治*・朝倉 淳・松浦武人・松宮奈賀子)

[参考文献]

- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻, 2007, pp. 43-56。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究II」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻, 2008, pp. 39-53。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究III」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻, 2010, pp. 95-104。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究IV」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻, 2011, pp. 155-168。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究V」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第18巻, 2012, pp. 129-140。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究VI」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第19巻, 2013, pp. 259-269。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究VII」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第20巻, 2014, pp. 161-181。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究VIII」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第21巻, 2015, pp. 143-161。
- 深澤清治・小原友行・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究IX」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第22巻, 2016, pp. 251-268。
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究X」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第23巻, 2017, pp. 103-116。
- 朝倉淳・深澤清治・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究XI」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第24巻, 2018, (印刷中)。